

## 三つの谷之者一竹の表象から

内 藤 久 義

NAITO Hisayoshi

神奈川大学非常勤講師

【要旨】中・近世の文献及び図像資料に谷之者と呼ばれる人々が登場する。彼らは同一の時代や場所に存在したのではなく、奈良、高野山、江戸の三箇所の異なる時代において『大乘院寺社雑事記』や『高野山文書』などの文献、また古絵図や刑罰執行方法を記した書物の図版に描かれている。彼らはその職能からも卑賤視された人々であったことが考えられ、居住地も谷や土手下など周縁とされる場所にあった。

中世の奈良では内山永久寺に隷属する谷之者たちが運搬に従事し、中世末から近世の高野山では遺体の埋葬や土木、また警固などに携わる谷之者がいた。江戸後期の江戸市中伝馬町周辺には穢多・非人頭弾左衛門の配下として、罪人の行刑を担う谷之者と称される人々の存在が記される。

さらに三箇所の谷之者は、竹という歴史的に被差別性を担った植物とも関わっていることに注目した。奈良の谷之者は主に竹を運搬したことが記され、高野山では僧侶の行列の先払いを谷之者が行うが、彼らはその際青竹を持つ。江戸の谷之者は、罪人の引廻しや刑罰の執行において様々な竹を用いたのである。被差別と竹細工との関係は多くの研究で指摘されながらも、その淵源について明解な理由は見出されていない。

本稿では奈良、高野山、江戸の三箇所の谷之者について、彼らが同質のヒエラルヒーを持つのか、またどのような被差別性を付された集団であったのかを検討した。それぞれの職能や、居住地、生活形態などから明確にし、さらに竹とどのように関わり、その被差別性の源についても考察を試みた。

### The three “Taninomono” from the representation of bamboo

**Abstract :** In the Middle and early modern times in Japan, there was a people called “Taninomono”. They appeared in Nara, Koya-san and Edo at different times. This is recorded in documentary and iconographic sources. Taninomono were probably discriminated by their occupations and lived in marginalized areas such as valleys.

The purpose of this study is to examine whether the “Taninomono” in Nara, Koya-san, and Edo were homogeneous in terms of hierarchy and how they were discriminated against, and to clarify their occupation, place of residence, and lifestyle. “Taninomono” is related to bamboo, and I will also discuss the relationship between bamboo and discrimination.

## はじめに

日本の中世、近世に「谷之者」と呼ばれる人々がいた。谷之者は同一の時代や場所に存在したのではなく、奈良、高野山、江戸の三箇所異なる時代において文献や図像資料に登場する。奈良の谷之者は寺社に隷属し竹や木材の運搬を行い、高野山では埋葬や土木や警固、江戸では罪人の処刑などに携わっていた。三つの谷之者の職能からは、被差別性を帯びた集団であったことが考えられるが、彼らが同名の呼称のもと、同一のヒエラルヒーを持っていたのかは明らかにされていない。

谷之者の名が初めて史料に登場したのは『大乘院寺社雑事記』（長禄二年・一四五八）である。かつて奈良にあった内山永久寺から、谷之者が竹や木材を運搬したことが記され、その後、高野山の谷之者が『高野山文書』『金剛三昧院文書』（慶長七年・一六〇二）に登場する。ここでの彼らは埋葬や土木、罪人の捕縛に関わったことが述べられ、近世の江戸では刑罰の執行方法などを絵入りで詳述した『刑罪大秘録』（天保六年・一八三五）という書物に、谷之者についていくつかの記述が現れる。彼らは牢獄があった江戸市中の伝馬町牢屋敷付近に居住し、行刑などを職掌とした。

これまで、それぞれの谷之者については少数の研究があるものの、三つの谷之者を包括的に論じたものはほとんど見られない。以前執筆した拙稿では高野山の谷之者については触れているが、奈良、江戸を含めた谷之者の全貌については不明瞭なままである<sup>(1)</sup>。

本稿では奈良、高野山、江戸の三箇所の谷之者について、文献だけでなく図像資料も用い、異なる場所と時代に登場する彼らが、同質のヒエラルヒーと被差別性を持った集団であるのか、それぞれがどのような職能を持ち、どのような生活を営んでいたのかを明確にすることを目的としている。また三つの谷之者は「竹」という被差別の歴史を持つ植物によって通底していることに注目し、この関係性についても論じてゆく。

## I 中世 奈良の谷之者

### (1) 先行研究から

奈良の谷之者は、先述した『大乘院寺社雑事記』（以下、『雑事記』）長禄二年（一四五八）閏正月条に登場する。室町幕府八代将軍・足利義政の命により、大和に河原者を派遣して寺の庭木を集めさせた際、内山永久寺からは谷之者（『雑事記』では谷之者、谷ノ者、谷人、谷者、谷夫と表記される）が運んだことが記されている。

奈良の谷之者についての先行研究は、昭和三十八年に渡辺広が「谷<sup>や</sup>の者考<sup>(2)</sup>」を著している。奈良、高野山、江戸の三箇所の谷之者について触れた数少ない論稿であるが、言及は高野山が中心であり、奈良の谷之者については紹介程度にとどまる。その後、ほとんど研究のなかった奈良の谷之者であるが、近年、山村雅史が「中世大和の被差別民一考<sup>(3)</sup>」において詳述しており、本稿もこの研究に示唆を受ける部分が多い。

山村は『雑事記』や内山永久寺関連の史料、また『大和国中世被差別民関係史料<sup>(4)</sup>』から、大和周辺において十三世紀中頃には、非人と区別された横行や細工の存在があったことを明らかにした。さら

に谷之者（山村は谷者と表記）は内山永久寺の管理下にあつて寺辺に居住し、同寺から運搬を行った谷之者とは、「種々の雑事に従事する被差別民であつた」と述べる。また近隣の高野山の谷之者が三昧聖的性格を帯びていたことから、奈良の谷之者は後に葬送に関わる職掌の人々との関連が想定できると示唆<sup>(5)</sup>した。

## （２）内山永久寺と大乘院

『大乘院寺社雑事記』は奈良興福寺の大乘院門主尋尊（一四三〇－一五〇八年）、政覚（一四五三－九四年）、経尋（一四九八－一五二六年）の三代にわたる公式日記類である。宝徳二年（一四五〇）から大永七年（一五二七）まで書き継がれ、谷之者だけではなく応仁の乱前後の畿内の様子を知る重要な史料である。この日記の長禄二年（一四五八）から明応三年（一四九四）までの九箇所に谷之者<sup>(6)</sup>についての記述がある。この九箇所に記される谷之者は、すでに山村が前述の論稿の中で提示しているが、本稿では「竹」という視点から再検討したい。（※傍線筆者）

### ① 長禄二年（一四五八）閏正月

（略）一内山木悉到来了、彼等ヨリ持進之、人夫ハ谷之者歟、食ハ不能下行者也、

### ② 長禄二年閏正月十四日条

一内山中院ヨリ太竹五本依所望進之、人夫谷者五人為年預召進之、食二升長屋御米下行此、一人宛四合分ナリ、料足ノ時ハ一人宛十文分下行之、近来儀也、

### ③ 長禄二年三月晦日条

一自京都被仰押板事、内山仏光院ニ令所望、今日到来了、谷夫六人シテ持参之、日食如例下行了、明日京都ニ可上也、

### ④ 長禄二年十二月十六日条

一松明三百把自内山進之、谷者三人、食一升二合下行了、

### ⑤ 長禄三年八月五日条

一自永久寺六本持竹五荷進之、谷者食事雖申入、惣山ヨリ何ニテモ進上之時ハ不能下行、自此方人夫ヲ召時ハ、一人別米四合分下行之云々、仍今日不行也、

### ⑥ 長禄四年十一月二十三日条

一自内山竹五荷進上、同上乗院法印五荷、中院僧都五荷、三輪寺三荷、各六本持也、自兼日所望之間進上、中院ハ依無人夫申請之、谷者五人仰年預召之、日食人別八木四合下行之、

### ⑦ 文明六年（一四七四）二月三日条

一上乘院竹五荷進之、人夫谷者也、五人四升下行了、

### ⑧ 文明十三年（一四八一）十月七日条

一為作事竹十荷仰安位寺之处、五荷進上、代物定使請取取進上之了、内山十荷之内六荷進上之、上乘院三荷進之、三人持夫佃<sup>マ</sup>下行如例、谷者召之故也、惣山分六人ニハ、雖為同谷者不下行者也、

### ⑨ 明応三年（一四九四）十二月十九日条

一内山中院僧都竹一本所望之、到来、谷者一人食四合下行之、毎度此人夫下行如此也、号細<sup>マ</sup>也、巨細条宗順ニ仰之、

『雑事記』に記される「内山」または「永久寺」とは、奈良県天理市にかつて存在した興福寺塔頭の内山永久寺である。谷之者は内山永久寺から主に大乘院へ、木材、竹、また押板や松明などを運んでいた。『雑事記』には特に竹の運搬の記述が多いことに気付く。谷之者が記される九箇所中六箇所(②、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨)において谷之者は竹を運ぶか、または竹に関わっていた。その内⑧では大乘院ではなく安位寺にも運んでいる。

谷之者を派遣した内山永久寺側の史料も見てみたい。内山永久寺は平安後期の永久年間(一一一三―一八八)に、鳥羽天皇勅願により大乘院の二世院主であった頼実が創建した。内山永久寺は大乘院の末寺として室町期まで隆盛したが、その後明治七年の廃仏毀釈により徹底的に破却され寺宝は散逸した。しかし幸運なことにいくつかの史料が残されたのである。この史料に『内山永久寺置文』(以下『置文』)、『内山之記』、『文永七年内山永久寺鎮守造営日記』がある。『置文』は保元元年(一一五六)の年号から始まり、正安四年(一三〇二)条が一番新しい。内容は平安後期から鎌倉にかけての事蹟やその記録的なものが多いが、まず仁安四年(一一六九)から始まる『内山之記』を検討したい。(※傍線筆者)

(略)中門并大門脇カへ塗之了、中門内外白沙二千余荷、両谷下人持之、大門内路次之 諸方垣者檜垣并竹檜垣也、

『内山之記』には谷下人が白沙二千荷余りを運搬したとの記述がある。谷下人は『雑事記』に記される谷之者と同一集団と考えてよいのではないだろうか。また「両谷下人」とあるように、永久寺の谷之者は一集団だけではない。それぞれの谷に住む下人集団が仕事に出ていたのであろう。また『置文』の仁安四年二月七日条にも「東西両谷付供僧三昧等、宜被催勤堂塔修理并雑役等子細事、」と記され、東西の谷には三昧聖たちとともに土木作業や雑役に関わる谷之者がいたのである。

その後も『多門院日記』永禄十二年(一五六九)正月十三日条には、「十三日、心経会在之、竹二南門、修南院、寺務、谷ノ宿ノ物二人被切了ト、坊へ不出」と伝えている。注目したいのはこの史料では「谷ノ宿ノ物」と呼ばれていたことである。宿と夙は同義であり、本居内遠の『賤者考』(弘化四年・一八四七)には「皆普通の里民より忌みて婚を通ぜず」、「産業に多く竹籠の類を造り出す、さる故に、市中にも籠細工をする者忌む人もあり、」と、夙は一般から排除され竹細工などに従事した人々であるとする。

内山永久寺の谷之者は「東西両谷」(『置文』)を根拠地とする集団であり、高野山の谷之者が後述する『紀伊続風土記』に「其居住の處を新坊谷とも東谷とも云」と書かれていることと同じく、谷に住む人々であった。『多門院日記』の「谷ノ宿ノ物」については、内山永久寺の谷之者との関連は不明であるが、やはり寺社に隷属する人々であったことが考えられる。

### (3) 竹散所

中世後期の山科家家司による日記、『山科家礼記』には竹の散所があったことが記される。竹を採取・販売する者は、貴族や寺社に属し公事銭を納めなければならなかった。竹は荘園制が崩壊するまでは、権勢者の管理下に育成される産物であり、竹供御人や竹の散所によって供給された。



林屋辰三郎の論を経て、散所は本所に対応する語であることが渡辺広や黒田俊雄によって指摘され、さらに脇田晴子は初期と後期の散所の状態を区別し、初期散所は「荘園領主の支配機構の一環として、本所に対する散在の所としての別荘、御願寺、津木屋所、牧などが、散所と呼ばれ」たとし、中世初期の散所において卑賤視は直接関係なかったとする。しかし後期散所では商工業者や芸能者など、土地を持たない者が荘園領主との人身的従属関係を残し、卑賤視の対象となっていたと記す。<sup>(19)</sup>

竹の散所も山科荘の領主支配のもと経営され、竹の供給には竹供御人という山科家に隷属する人々が関わっていた。寄人、神人、供御人、散所雑色等の呼称は所属によって異なるが、「人身をどこかの権門に従属させて、課役一主として臨時雑役等の国役一を免れんとしたものであり、その点においては共通する性格をもつものであった<sup>(20)</sup>」と脇田が述べるように、竹散所の人々は山科家に身を寄せ、竹を供給し公事銭を納入することにより地子や課役を免れたのである。これは農耕を中心とした定住社会の人々の側から見ると、羨視とともにその身を貴族や寺社に隷属させるという関係性に、蔑みの眼差しがあったことであろう。

現在の京都府山科区大宅・野村・西山地区に比定される場所には山科小野荘<sup>(21)</sup>があり、ここを本所として山科散所があった。この散所は藤原忠実から白河院に寄進されたもので、川嶋將生によれば白河新御所の庭払に従事していたのではないかとする。<sup>(22)</sup>『山科家礼記』の竹についての初出は、応永十九年（一四一二）七月二十八日条である。同書には竹に関する多くの記述が見られ、畿内に山科家配下の竹を扱う散所があり、また竹の散所以外にも「竹うり」がいたことが記されている。さらに竹座という同業者集団があり、いずれも公事銭を山科家に納めていた。山科散所及び竹散所の場所については明確にされていない。また山科散所と竹散所が同一のものであるかも不明であるが、『山科家礼記』には「掃部」と「竹うり・竹うりさん所」の文字がセットで記述されることが多い。<sup>(23)</sup>

一、掃部方竹うりさん所之者公事銭二百文出候也（文明四年二月二十三日）

一、竹うりさん所者三百文出之、掃部坂本へ下向候也（文明四年七月十四日）

「掃部」とは庭払を職掌とする山科散所のことであろう。「掃部方竹うりさん所」と記されることから、竹散所は山科散所内のもう一つの機能であったことが考えられる。竹供御人がいた「こわた」「ふかくさ」（現在の宇治市木幡、京都市深草）と、本所である山科小野荘は五、六キロメートルの距離であることから、この周辺に山科散所・竹散所があったのではないだろうか。また『言継卿記』天文十九年（一五五〇）正月十七日条には「自深草三毬打竹五本持来了、」と、京都深草から三毬打に用いる竹が運ばれている。三毬打は近世以降左義長と表記されるが本来宮中の火祭行事であり、小正月に毬杖（竹）を立て吉書を結び、陰陽師らが歌い囃しながら焼いたとされる。<sup>(24)</sup>竹は神事や芸能とも関わっているのである。<sup>(25)</sup>

内山永久寺（奈良県天理市）、大乘院（奈良県奈良市高畑町）、安位寺（奈良県御所市）、山科荘（京都府山科区）を地理的關係から見てみたい。大乘院と内山永久寺が直線距離で九キロメートル程、内山永久寺から安位寺へは十キロメートル弱、竹散所のあった山科と内山永久寺の間は四十キロメートル強の距離であるが、いずれも徒歩一、二日圏内に散在している。<sup>(26)</sup>中世の谷之者が内山永久寺を中心に大乘院や安位寺へ竹を運び、ほぼ同時期に京都山科荘には竹の散所があったのである。内山永久

寺の谷之者と山科荘の竹散所との関連史料は見つかっていないが、竹を通じて何らかの接触があった可能性も考えられる。

## Ⅱ 中・近世 高野山の谷之者<sup>(27)</sup>

### (1) 「谷之者條々掟書案」

高野山は空海により紀伊山中に創建された聖地である。弘仁七年（八一六）、空海はこの地に真言密教の根本道場・金剛峯寺を開山した。平安時代には隆盛を極め、寺領は全国に広がり十七万石までに達する。秀吉の紀州攻め以降縮小したが、それでも寺房は二千を超えていた。高野山には一大宗教都市が形成され、そこには僧侶だけでなく、宗教都市を機能させるために必要とされる職能を持つ人々も居住したのである。また高野山にはハンセン病を患う人々が救いを求め、中世から近代まで高野山に住み続けた。業病とされた身体を持つ彼らは、高野山のヒエラルヒーにおいて禿法師と称され最末端に位置づけられた。<sup>(28)</sup>

高野山に居住する集団の一つに谷之者がいた。彼らは禿法師のように業病者とされる人々ではない。しかし土木の専門性を持ちながらも、死や穢れに触れる仕事に携わったことで卑賤視される立場に置かれた。奈良に続いて登場する第二の谷之者は、『高野山文書』『金剛三昧院文書』慶長七年（一六〇二）七月五日条「谷之者條々掟書案」<sup>(29)</sup>（以下、掟書案）を嚆矢とし、同書には多数の谷之者関連の記述がある。（※傍線筆者）

#### 谷之者條々掟書案

被仰下條々

一太刀錢五斗之事、先規者誰為五十疋、以隣惣八木ニ而被仰付事、

一繩錢同前之事、

一山下被召遣時は人別貳升宛可為日傭事、付、於被召遣處まかなひ無之時ハ壹升加増たるべき事、

一葬礼之時料物之事、

上々ハ五石、上ハ三石、中ハ貳石、下ハ壹石、下々ハ五斗、同宿分ハ三斗たるべき事、

一器物持来可申事、

右條々堅被仰付之旨如件、

學領

慶長七年

年預判

七月五日

右谷之者ニ被仰付者也、

「掟書案」には太刀錢、繩錢、葬礼時の料物についての記述が見られ、彼らは捕縛や葬送など穢れに接触し、また「器物持来可申事」とあるように食事に別器を用いていたのである。

## (2) 先行研究から

高野山の谷之者についての先駆的論述では、天保十年（一八三九）に刊行された『紀伊続風土記』がある。紀州藩の命により本居内遠らが編んだ紀伊国の地誌であり、「高野山之部學侶」の項では高野山内に集住する者たちの職種を挙げ、谷之者については「新坊」という呼称で記されている。同書では谷之者の来歴を述べ、また彼らは隠坊・三昧聖とも呼ばれ埋葬に関する仕事、墓石の修繕や高野山奥の院骨堂の清掃、行列の先払いを行っていたとする。

大正期になると喜田貞吉が谷之者に着目し、『民族と歴史』第三卷第六号（大正九年・一九二〇）に「<sup>(30)</sup>声聞師考—古代社会組織の研究」を掲出した。『高野山文書』や『紀伊続風土記』の内容から、高野山の谷之者や東寺の散所法師、興福寺の唱門師（<sup>(31)</sup>声聞師）の職能の同一性を指摘した。

昭和三十八年に前述した渡辺広が「<sup>(31)</sup>谷の者考」を発表する。高野山の谷之者が抑圧された境遇に対して抵抗を試みていることに触れ、また土木事業の専門性を持つことから、散所・声聞師に類似していたと述べる。その後、室木弥太郎は芸能史の視座から谷之者について言及し、高野山が舞台である説経『かるかや』の一場面、苅萱道心の妻の遺体処理や火葬を、道心と息子の二人だけで行ったことについて、「高野山ではこの仕事は、<sup>(32)</sup>谷の者（新坊）の専業」であるとしている。

高野山大学で教鞭をとられた日野西眞定は、高野山の三昧聖などを中心に長く研究に取り組み、論稿だけでなく高野山内の地図を収載した古絵図集も編纂している。日野西の「<sup>(33)</sup>高野山三昧聖の研究」では、正保元年の検見から学侶・行人・聖・客僧・谷之者が五類型され、一般の聖寺院より下級に置かれていることを明確にした。また谷之者は行人方興山寺の支配下に置かれ、正規の僧籍を持たないことを述べている。

平成になると『高野山文書』の谷之者関連の事項を含んだ史料が、金剛峯寺や高野山真言宗当局から提供され、和歌山人権研究所・和歌山の部落史編纂会ではこれらを『和歌山の部落史 史料編 <sup>(34)</sup>高野山文書』として二〇一一年に刊行した。この新出史料を踏まえ、現在の高野山谷之者研究で最も詳述されるのが、藤井寿一による「<sup>(35)</sup>高野山「谷之者」の身分意識」であろう。谷之者が被差別構造の中にあって、専門集団としてのアイデンティティを持っていたことなど心性にも論及している。また戦国末期に一般宗徒と交わらない時宗方の聖の坊が高野山内にあり、これが江戸期の谷之者の前身ではないかと論じた。他にも山陰加春夫の高野聖の研究など秀逸な論稿がある。<sup>(36)</sup>

## (3) 高野山谷之者のヒエラルヒー

先述した『紀伊続風土記』「高野山之部學侶」『非事使事歴』「附録」に、谷之者の居住地や職掌が記される。『非事使事歴』では高野山の聖の事歴や類別を記し、「附録」には高野山域内に集住する者の二十八種の職掌について述べる。

①儒者、②医師、③道心者、④佛師、⑤佛絵師、⑥大経師、⑦経師、⑧書林、⑨大工、⑩木挽、⑪葺師、⑫左官、⑬彫刻師、⑭鍛冶、⑮張付師、⑯塗師、⑰飾師、⑱把針者、⑲珠數屋、⑳豆腐屋、㉑諸町人、㉒山男、㉓日雇、㉔杣、㉕檜皮剥、㉖山奴、㉗新坊、㉘禿法師の順で紹介しており、「附録」に挙げられた人々の職業は、身分的ヒエラルヒーによって順位付けされていることが考えられる。

儒者や医師は上位にあり、最後に記される禿法師（㉘）はハンセン病者とされた人々である。禿法師は同書によれば弘法大師が彼ら業病者たちを憐れみ、阿弥陀仏一体を彫刻して念仏の法を授け阿弥

陀号を許したという。ハンセン病患者たちがこの地に集住し、後に明遍上人の法化に浴し、弘法大師から伝授された膏藥の販売や金剛草履を作って生業としたとされる。谷之者は禿法師の一つ前の新坊(27)の項に述べられる。(※傍線筆者)

新坊 又谷之者といふ。其居住の處を新坊谷とも東谷とも云。大渡の橋より巽方壹町許廿四坊あり。其総堂は釈迦如来を本尊とし。弘法大師。行基菩薩。頼慶法印の木造を安置す。彼黨の説に。舊來南都に住居して。行基菩薩の法化に浴しけるに。弘法大師の時より此山に移住す。此山に移て後大師の命によりて葬送の事を勤む。俗にいふ隠坊筋目のものを剃て此黨に入る。数百年の後。慶長年間所由ありて。遍照光院頼慶の恩渥にて。十八道の密供を略傳す。今に血脈を継もの〔は〕必〔す〕十八道の加行を勤む。(略) 諸法事の出仕の警固。寺家の夜番。各院墓所の守護を勤む。爾はあれとも其後数々の僭上の風萌す。此黨元來剃頭のみにて。至極の□□なれば。立付ようのものを著して青竹を持。寺務行列の先拂。其外諸向の警固を命す。よりて舊く法衣珠數などの沙汰なし。頼慶の縁ありて。彼□の内にては竊に直綴なと著すとも聞ゆ。畢竟僭上にて沙汰の限にあらず。比黨の所業。満山葬送の時穴堀等を役し(略)

谷之者は寺や墓所などの警固を行い、また埋葬や墓穴掘りなど新坊(隠坊)の仕事に携わった。彼らは元々奈良に居住し行基の教えのもとに暮らしていたが、後に高野山に移住し弘法大師の命により葬送を勤め、その後頼慶により十八の行道を伝えられたとする。注目をしたいのは、谷之者は土木や葬送、警固の仕事だけではなく、もう一つの職掌として「青竹を持」ち寺務行列の先払いを行っていたことである。

高野山の事例ではないが、山路興造は「さまざまな行事に駆り出される警護役が手にする竹の棒も、一方がさゝら状に割れているのが原則で、(略) このさゝら竹を手し、その役目を担ったのが本来被差別民であった」とし、大藤時彦は、備中では隠坊は死者及び非人番、また正月には村内に茶筌を配り歩いたので茶筌とも呼ばれ、竹細工や見張り番も行っていたとする。江戸時代の出雲地方では、鉢屋は牢獄付近の監視を行い、稼業として竹細工に携わったことを倉光清六は述べるのである。(37)(38)(39)

高野山の谷之者は葬送や土木以外にも山内の警固を行っており、他所でも被差別性の強い人々が警備や村落内の監視を行い、竹細工を職掌とする事例があったのである。高野山の谷之者が竹細工に関わったという史料は見当たらないが、寺務行列に際し竹を持って先払いをしていたことが、藩命により編纂された『紀伊続風土記』に記されていることから、竹は高野山においても特別な職業的表徴を持っていたことが考えられる。

#### (4) 高野山古絵図からの検討

『紀伊続風土記』には、谷之者の居住地を「其居住の處を新坊谷とも東谷とも云。大渡の橋より巽方壹町許廿四坊あり。其総堂は釈迦如来を本尊とし。弘法大師。行基菩薩。頼慶法印の木造を安置す」と記す。彼らは高野山奥の院に通じる大渡の橋(大橋・一の橋)から、東南の方向へ一町ほどの東谷に住み、集落には釈迦堂があったとする。(40)

日野西が編んだ『高野山古絵図集成』(以下『古絵図集成』)には、近世から昭和初期に至るまでの高野山の絵地図五十点を収載している。この『古絵図集成』には、『紀伊続風土記』に述べられる谷



之者や禿法師の居住地が描かれたものがあり、高野山において卑賤視された人々の生活実態を視覚的に浮き上がらせる。拙稿「高野山・谷之者の原風景—図像と文献史料からの検討」では、この『古絵図集成』の中に、谷之者及び禿法師の居住地と比定される十一點の絵図を見出し詳述したが、本稿でもその概要を述べたい。

谷之者の居住地は以下の絵図に描かれ、<sup>(42)</sup>その場所はいずれも大橋（一の橋）の東南周辺に描出される【図1】【図2】。

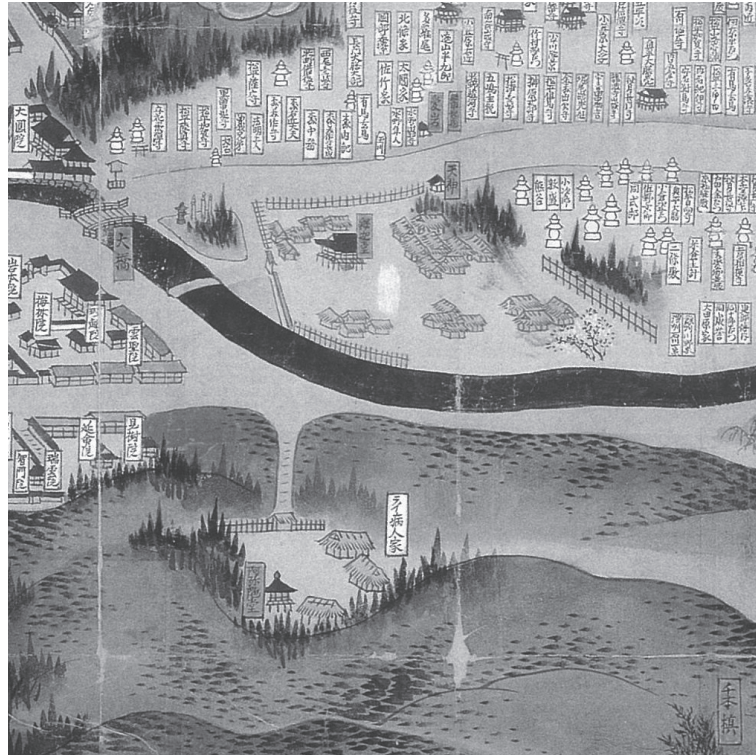


図1 北西に大橋、中央に谷之者、南に禿法師の集落を描く。「高野全山及び周辺の絵図（1）」（1811年）部分 赤松院蔵

#### ・谷之者居住地描写絵図一覧

- ①「御公儀上一山図」正保三年（一六四六） 金剛峯寺蔵
- ②「高野山絵図」承応二年（一六五三） 金剛峯寺蔵
- ③「高野山総図」万治元年（一六五八） 金剛峯寺蔵
- ④「高野山壇上寺家絵図」宝永三年（一七〇六） 金剛峯寺蔵
- ⑤「奥院絵図」宝永四年（一七〇七） 金剛峯寺蔵
- ⑥「高野山奥院総絵図」寛政五年（一七九三） 持明院蔵
- ⑦「高野山古図」寛政八年（一七九六） 西室院蔵
- ⑧「高野全山及び周辺の絵図（1）」文化八年（一八一） 橘保春画 赤松院蔵
- ⑨「高野全山及び周辺の絵図（2）」江戸中期 西南院蔵
- ⑩「高野全山及び周辺の絵図（3）」江戸後期 海照寺蔵
- ⑪「高野全山及び周辺の絵図（4）」江戸後期 持明院蔵

大橋とは奥の院弘法大師御廟への参道を横切る御殿川に架かる橋で、御廟まで約一・五キロメートル





図2 奥の院参道付近。この周辺に谷之者の集落があったとされる。(筆者撮影)

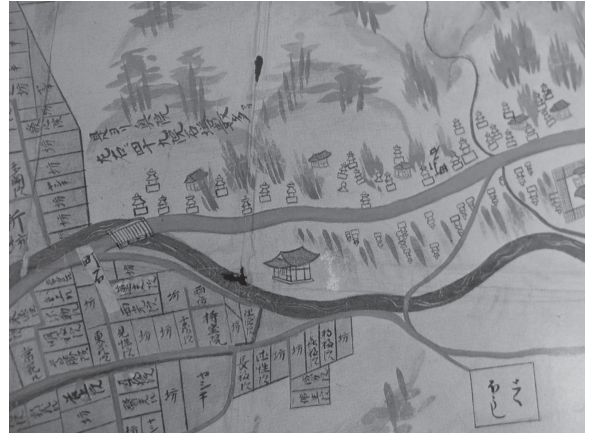


図3 中央にある谷之者の集落には垣も橋もない。南東の禿法師の住居には「とくほうし」の文字のみ記される。「高野山総図」(1658年)部分 金剛峯寺蔵/高野山霊宝館提供

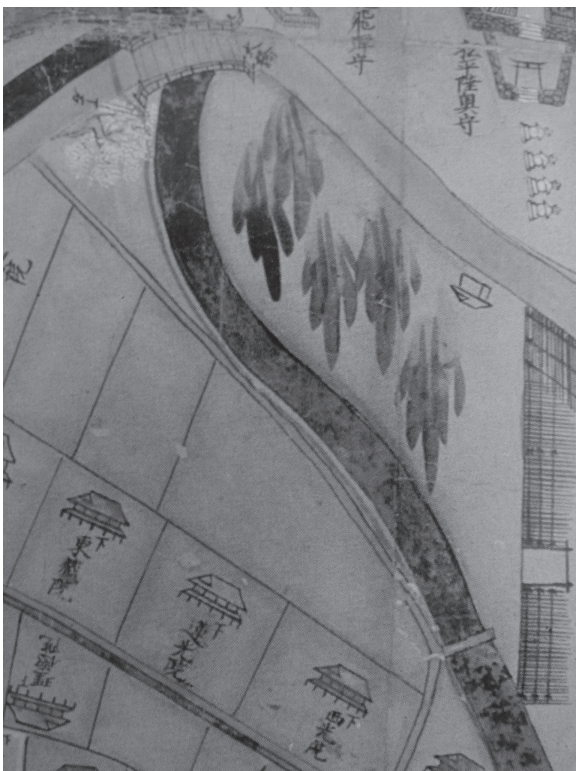


図4 北に大橋(一の橋)、東南に谷之者の集落を囲う垣、その下側に小さな橋を描く。「高野山壇上寺家絵図」(1706年)部分 金剛峯寺蔵/高野山霊宝館提供

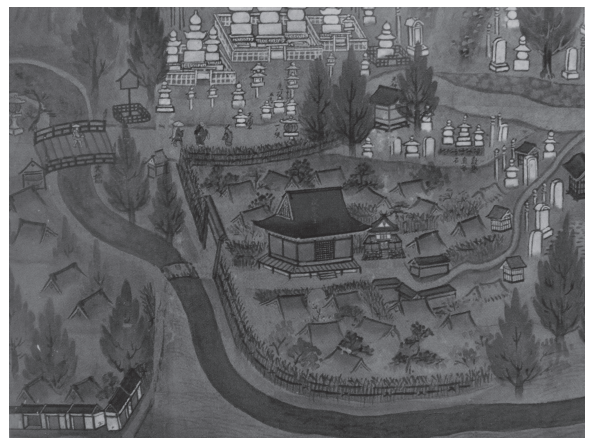


図5 図1では藁葺きだった家屋が板葺きになる。「高野全山及び周辺の絵図(2)」(江戸中期)部分 西南院蔵



図6 大橋と遜色ない大きさで谷之者の集落の橋が描かれる。「高野全山及び周辺の絵図(3)」(江戸後期)部分 海照寺蔵

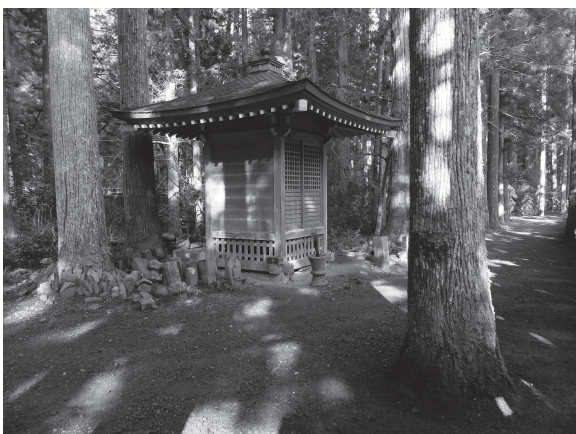


図7 禿法師が住んだとされる場所には現在も阿弥陀堂がある。(筆者撮影)





図8 行列の先頭で青竹を持つ谷之者と考えられる二人の男。  
「高野全山及び周辺の絵図(2)」(江戸中期)部分 西南院蔵

ルの距離にある境界的な場所である。禿法師の居住地については絵図の画面が切れていて描写のないものもあるが、ほぼ谷之者とセットで描かれている。掲出した絵図【図1】には禿法師の居住地に「ライ病人家」と書かれているが、他の図では「とくほうし」、「トクボウシ」と但書きされているものもある。また「物吃カ」と書かれたものもあり、禿法師とは業病を負い物乞いをしながら、高野山の谷奥に居住する者たちとして認識されていたのであろう。

江戸期の年代明記のある絵図では、正保三年(一六四六)から文化八年(一八一―)にかけて、さらに年記のない江戸後期とされるものまで含めると、彼らの居住地は二百年以上にわたり描き続けられていた。谷之者や禿法師の集居の周りには時代により垣を描き、閉鎖的な空間であることが見て取れる。また参道側(北側)には北野天神社があり、集居内には『紀伊続風土記』のとおり釈迦堂が描かれる。各絵図は模倣したことも考えられるが、二百年のタームの中で様々な変化が見られた。

谷之者の居住地が描出される最も古い絵図①「御公儀上一山図」(一六四六)から③「高野山総図」(一六五八)【図3】までは、谷之者の集落に垣はない。しかし④「高野山壇上寺家絵図」(一七〇六)【図4】になると垣を描くようになり、以降、垣はすべての図に描かれ、図1の「高野全山及び周辺の絵図(1)」(一八一―)では、東西南北が垣で囲まれるようになった。時代が下るにつれ谷之者の居住地は、より閉鎖性を帯びるのである。

家屋の描写は藁葺きから板葺きへと変化している。屋根の形状が確認できる⑤「奥院絵図」(一七〇七)から⑧「高野全山及び周辺の絵図(1)」(一八一―)までは、谷之者の家屋は藁葺きで描かれているが、⑨「高野全山及び周辺の絵図(2)」(江戸中期)【図5】では、集落内はほぼ板葺きになり藁葺きは二、三軒だけである。

もう一つの特徴として橋の描写の有無がある。谷之者の集落近くには大橋があるが、④「高野山壇上寺家絵図」(一七〇六)【図4】から集落西側に垣とともに小さな橋を描くようになり、この橋は年代を下るごとに大きなものへと変わってゆく。谷之者は①「御公儀上一山図」(一六四六)から③「高野山総図」(一六五八)の頃までは、大橋を使うかもしくは橋を使わずに渡渉していたことが考えら

れる。しかし、④「高野山壇上寺家絵図」になると谷之者専用の橋が描かれ、橋の造作は年々立派になり⑩「高野全山及び周辺の絵図（3）」【図6】や⑪「高野全山及び周辺の絵図（4）」が描かれた江戸後期になると、大橋ほどではないが遜色なく描写されるようになる。さらに④「高野山壇上寺家絵図」（一七〇六）までなかった北野天神社が、⑤「奥院絵図」（一七〇七）に描出され、以降江戸後期の絵図まで描き続けられた。

禿法師の集住地については、『紀伊続風土記』に「蓮華谷の東。大河の南岸に阿弥陀堂あり」と書かれているとおり、谷之者の居住地からさらに南側、御殿川左岸の深い谷間に禿法師の集居は描かれている【図1】。当初、絵図には家屋の描写はなく「とくほうし」又は「トクボウシ」の名称のみ記されていたが、⑤「奥院絵図」（一七〇七）から藁葺きの家屋と阿弥陀堂を描くようになり、以降の絵図に阿弥陀堂は描かれ続ける【図7】。集居は谷之者よりかなり小規模（二、三軒）で、東西南側を山に囲まれた谷間に藁葺きの家屋がある。正面入り口には垣や柵が巡らされ、より閉鎖性の強い空間として描かれるのである。

さらに絵図には、谷之者ではないかと考えられる人物も描写されている。『紀伊続風土記』に谷之者を「此黨元来剃頭のみにて。至極の□□なれは。立付ようのものを著して青竹を持。寺務行列の先拂。其外諸向の警固を命す。」とあり、⑨「高野全山及び周辺の絵図（2）」（江戸中期）には、輿に乗った高僧の行列を描き、十数名の供のうち、先頭（先払い）には剃髪で棒を持つ二人の男がいる【図8】。立付袴は履いていないが墨色の衣を着ており、剃髪で手には緑色の竹のような棒を持つのである。

### Ⅲ 近世 江戸の谷之者

#### （1）『刑罪大秘録』

江戸の谷之者は『刑罪大秘録』という江戸後期に出版された、犯罪者の刑罰方法を図入りで記載した書物に現れる。同書の原本は不明であり、筆者の確認した写本で最も古いものは、九州大学医学図書館が所蔵する天保六年（一八三五）、中浣写筆の銘のあるものである。諸本については下記に一覧したが、それ以外にも国立公文書館（題名『徳鄰巖秘録』）にも蔵され、未見の関連する写本は多数存在すると思われる。

- ①『刑罪大秘録』天保六年（一八三五） 写筆 九州大学医学図書館蔵
- ②『刑罪大秘録』天保七年（一八三六） 写筆 国立国会図書館蔵<sup>(43)</sup>
- ③『刑罪大秘録』天保十二年（一八四一） 写筆 都立多摩図書館蔵
- ④『刑罪大秘録』嘉永三年（一八五〇） 写筆 ベルリン州立図書館蔵<sup>(44)</sup>
- ⑤『政刑秘鑑（刑罪大秘録）』嘉永三年（一八五〇） 写筆 個人蔵

これらの写本はタイトル名や図版、文字の異同・欠如はあるが内容は概ね同じである。しかし諸本で「谷之者」と表記される箇所が、ベルリン州立図書館蔵本では「善之者」または「矢之者」と記されていることが大きな違いである。<sup>(45)</sup>

ここで検討したいのは、江戸の谷之者は「たにの者」か「やの者」であるのかという点である。奈

良及び高野山の谷之者については、彼らが谷に住む人々であることから「たにの者」であると考え  
 る。江戸の谷之者も「土手下」に居住していたが、関口博巨は「享保六年（一七二一）に弾左衛門が  
 幕府へ提出した言上書（「旧記拾要集」）などでは「浅草谷村」「谷之村」と書き、寛政元年（一七八九）  
 の書付では手下を「矢之もの」と称していた（「南撰要類集」<sup>(46)</sup>ほか）と指摘する。同箇所には「穢  
 多頭弾左衛門手下之もの、矢之もの<sup>(47)</sup>与唱候儀ニ付、」と書かれ、弾左衛門の姓である矢野から与えた  
 ことを述べる。それ以外にも弾左衛門関係史料の「安永撰要類集」「諸色調類集」に「矢之もの」の  
 明記が見られ、前述のベルリン州立図書館蔵本の図版に、谷之者を「矢之者」と記している箇所があ  
 ることから「やの者」<sup>(48)</sup>であると考ええる。

## （２）先行研究から

「朝野新聞」に明治二十五年四月から二十六年七月まで連載された「徳川制度」<sup>(49)</sup>という記事に、江  
 戸の谷之者について触れた箇所がある。筆者未詳の新聞の読み物として書かれたもので、信憑性に乏  
 しい部分もあるが、「徳川制度」には江戸の被差別民の構造を、弾左衛門を頂点に、善七、松衛門と  
 続き、その下に支配頭、小屋頭を配すと書かれている。

この支配頭の一人に「谷の者 長兵衛」がおり、彼は小屋頭三十六人、大部屋一軒、非人三十人を  
 統べる頭であった。長兵衛は「伝馬町牢屋脇の土手下に<sup>(50)</sup>占居」しており、牢獄内の雑事を行っていた  
 とする。「谷の者 長兵衛」については「非人頭暇牢番非人内借願」という天保十五年（一八四四）  
 から文久二年（一八六二）まで記録された史料に、長兵衛ではないかと思われる者が登場する。同書  
 の安政六年（一八五九）三月十三日に、車善七以下小屋頭たちの拝借金願が綴られており、長兵衛は  
 「御牢屋敷御用取次并御傳馬人足掛 小傳馬町壱町目 河岸小屋頭 長兵衛」<sup>(51)</sup>と記される。牢屋敷は  
 現在の東京メトロ小伝馬町駅に近い大安楽寺や十思公園一帯にあり、晒し場は日本橋だが刑場は伝馬  
 町牢屋敷の敷地内<sup>(52)</sup>にあったという。

その後の谷之者への言及は、喜田貞吉が主筆を務める『民族と歴史』第四巻第四号（一九二〇年十  
 月）に、わずかであるが森貞二郎が述べている。

【谷の者】賤民の異名に、今坂の者、橋の下<sup>〇〇</sup>の者、岡の者、誓願寺の者など、云ふのがある趣で  
 あるが、江戸でも穢多の事を<sup>〇〇</sup>谷の者と云った。是は賤民を高い處に住はせるのは不自然で、大概  
 谷の様な低い處に住はせるから起つた名であらう。刑罪秘録の圖に、晒し物警術に、<sup>〇〇</sup>谷の者番人、  
<sup>〇〇</sup>非人番人と、二種の番人が共同で之を守つて居る圖があり、獄門の圖にも<sup>〇〇</sup>谷の者六人、<sup>〇〇</sup>下非人、  
<sup>〇〇</sup>非人六人で番をする趣が記してある。非人と云ふのは乞食であるから、谷の者と云ふのは穢多の  
 部類であらう。<sup>(53)</sup>

森は谷之者を「穢多の部類であらう」と述べるが、当時の卑賤視された人々の中での谷之者の存在  
 を、穢多や非人のヒエラルヒーを含め今一度考慮しなければならない。

## （３）江戸賤民のヒエラルヒー

穢多・非人総支配頭弾左衛門の配下に車善七がおり、その手下は勧進や鳥追などの他に、清掃や物



貫い、また御仕置や牢屋・奉行所の囚人の管理にも携わっている。<sup>(54)</sup>善七の下部組織に谷之者は属し、罪人の行刑に立ち会った。谷之者が描かれる『刑罪大秘録』「引廻御仕置之事」の条を見てみたい。牢を出た罪人が刑場へ向かう引廻しの様子を図に描き、横目や非人とともに谷之者は本文及び図版の中に登場する【図9】。この引廻し一行は、都立多摩図書館蔵本では以下のように記される。



図9 引廻し行列。谷之者や非人、横目が描かれる。  
『刑罪大秘録』国立国会図書館蔵本（1836年）

#### 引廻し行列

- 一 先拂非人五人                      一 幟持 手代り共非人三人
- 一 捨札持 手代り共三人            一 鍵二本 手代り共谷之者四人
- 一 捕道具二本 同谷之者四人 但指又
- 一 囚人ニ付添非人四人            宰領谷之者 貳人
- 一 宰領小屋頭非人貳人

刑場において谷之者は鍵や捕道具を持って罪人の引廻しを行う。諸本の図版でも同様に、後ろ手に縛られた罪人が馬に乗せられ、これを引廻す十数名の男たちが描かれている。人物にはそれぞれ但書きがあり、先頭は幟を持つ非人、捨札を持つ非人、鍵を持つ男、馬の轡をとる男、朱鍵を持つ谷之者、馬の向こう側から頭部のみを見せる非人、罪人の腰紐を掴む非人、刺又を持つ谷之者、突棒を持つ谷之者、列の最後には横目宰領がいる。

図版からは頭髪や履物に身分的ヒエラルヒーが見て取れる。諸本の非人の足元が裸足であるのに対し、谷之者は草履を履いており同様に横目も草履を履く。頭髪については、横目と谷之者は月代を剃



り髷を結っているが非人は斬髪である。

『弾左衛門由緒書』明和二年（一七六五）二月「弾左衛門江非人の儀相尋候答書」には「斬髪のは皆平非人にて御座候、<sup>(55)</sup>」との記述がある。しかし、非人は結髪し平人のように扮することもあり、度々苦情が出ている。弾左衛門は「近來非人共身形平人ニ紛敷、<sup>(56)</sup>」と、非人が髪を結って平人に紛れることを嚴重に取り締まる旨を述べている。非人は九州大学医学図書館蔵本、国立国会図書館蔵本、ベルリン州立図書館蔵本、個人蔵本では明らかに斬髪で描かれているが、都立多摩図書館蔵本のみ月代が剃られている。

さらに図版を見てゆくと突棒を持つ谷之者と鑓を持つ谷之者は刀を二本差している。横目に刀は描かれていないが、着衣・髪型・履物・手にする刑具に、非人と谷之者は明確に身分差が現れている。『刑罪大秘録』には図版だけでなく、文中にも非人と谷之者を区分して表記することからも、彼らには非人とは異なるヒエラルヒーが付されていたことがわかる。処刑においても職掌は分担され、ベルリン州立図書館蔵本「獄門御仕置之事」には、「死罪御仕置ノ通首打落シ候得ハ非人直ニ首引揚手桶ノ水ニテ洗ヒ」と、非人は直接死体に触れる仕事をしており、さらに「磔御仕置之事」には以下のように記される。

下働非人鎗ヲ持左右ヘ分レ候内一人見セ鎗ヲ突イダス、囚人面ヨリ二尺ホト隔アリヤ／＼／＼ト  
聲ヲ掛ケ、残り一人鎗ヲ構ヘ居リ見セ鎗ヲ引、直ニ脇バラヨリ肩先ヘ鎗ノ先キ一尺餘突出シート  
捻リ鎗ヲヌク<sup>(57)</sup>

非人は罪人を刑殺しその死体を処理する役目であるが、谷之者は鑓や突棒、刺又などの捕道具を持ち行刑の警固をするのみで、直接死の穢れに触れることのないポジションにいたのであろうか。

#### （４）刑罰と竹

刑場では様々に竹が使用された。罪人を運搬する唐丸籠、火刑の際に罪人の上半身を固定するのに輪竹を使い、また斬首された首を俵に入れ、これを担う棒に青竹を用いた。さらに罪人の首を挽く道具に竹鋸があり、『刑罪大秘録』には大竹を二つに割り長さ三尺であったことが記される。鋸挽きは江戸の行刑において最も重罪の者に科した。室町期には実際に首を挽かれたが、江戸期になると様式化し竹鋸は象徴的な道具として存在した。<sup>(58)</sup>

もちろん竹は刑罰にだけ使われたのではない。建築材から日用品や楽器と、竹は人々の生活を支える重要な素材であった。広重の『名所江戸百景』に「京橋竹がし」がある【図 10】。京橋川の左手には切り出された竹材が要塞のようにそびえ立ち、川面に浮かぶ舟には竹籠が積まれている。中世では権勢者によってコントロールされた竹であるが、江戸期には庶民の手により大量に流通消費していたのである。竹河岸は京橋川沿いにあった。現在の京橋三丁目水谷橋公園の近在である。牢舎のあった伝馬町から約二・五キロメートルとほど近い。『刑罪大秘録』「御仕置御入用之事」には、「一同竹但右同断京橋竹町月行事江申付ル」、「京橋竹町御役竹」と書かれ、竹河岸を通じて谷之者や非人が行刑に使用する竹が供給されていたのである。

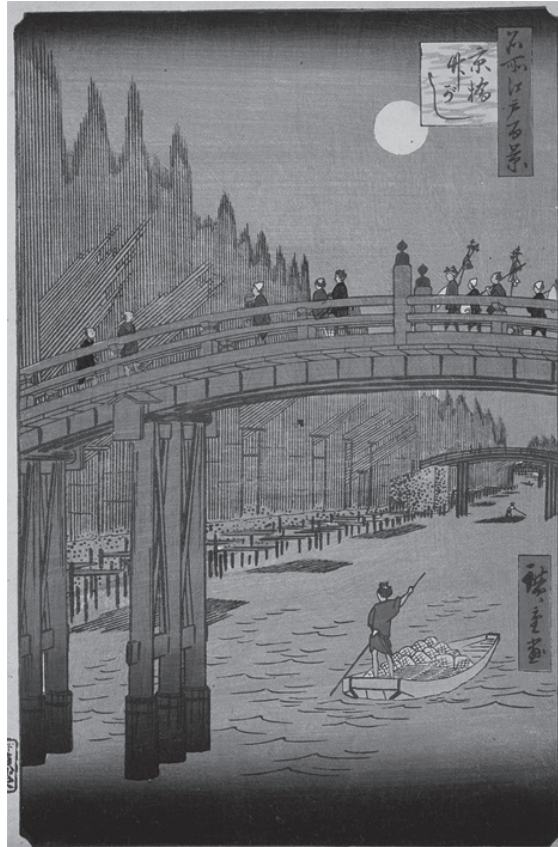


図10 『名所江戸百景』「京橋竹がし」(1856-1859)  
歌川広重 国立国会図書館デジタルコレクション

#### IV 三つの谷之者

##### (1) 谷之者の職能

谷之者は中世の奈良、中世末から近世にかけての高野山、江戸後期の江戸市中に存在が記された被差別性を帯びた人々であった。奈良の谷之者は東西の谷に集住し、高野山では「新坊谷とも東谷とも云」われる谷間に住んだ。江戸の谷之者も「伝馬町牢屋脇の土手下」という谷間に居住している。そして三つの谷之者は様々な竹と関わるのである。

内山永久寺に隷属する奈良の谷之者は、材木や砂などとともに竹を運搬する役を担い、同じ畿内には竹散所が存在した。山科家に属する竹供御人は地子が免除される代わりに、竹の納入や公事銭によって代替した。

高野山の谷之者については、先学の研究が明示するように彼らは三昧聖的性格を持ち、隠坊とも呼ばれ遺体の処理や埋葬、さらに土木や警固など多岐にわたる職掌を持つ人々であった。『紀伊続風土記』<sup>(59)</sup>に記された高野山の職業集団の中で、非人番の「山奴」、「新坊(谷之者)」、「禿法師」がその居住形態や職能からも卑賤視があったことが考えられる。

しかし高野山の古絵図からの推測ではあるが、十七世紀以前の谷之者については、谷間の地に居住していたものの、後年の絵図に描かれる垣や専用の橋ではなく、他所の往来にも庶人と同じ橋を使い閉鎖性は薄かったのではないだろうか。ところが十七世紀初期には垣が描かれはじめ、十九世紀に入ると四方を垣で囲われてしまう。『紀伊続風土記』が刊行された天保十年(一八三九)頃の集落には、谷之者専用の橋が描かれ、周囲から隔絶された状態に強い卑賤観が読み取れる。

江戸中期以降、谷之者への卑賤視はより強くなるが、同時に高野山での彼らは確固たる地歩を築いていたのではないだろうか。当初、谷之者専用の橋は小さく簡易なものであったが、江戸後期になると大橋と遜色がないほどに大きな橋が描かれ、また家屋も藁葺きから板葺きへと変わっている。遺体の埋葬など死の穢れに接する仕事だけでなく、土木技術において彼らは高い技量を示し、高野山になくはない存在となっていたことが考えられる。

江戸の谷之者については「地域によっては、長吏や非人は十手を持ち、下級警察の役割を担うこともあった<sup>(60)</sup>」と関口が指摘するように、谷之者は行刑に携わったが、それだけではなく警察的な職分も担っていたことが考えられる。弾左衛門関係史料「諸色調類集」には、無宿人の狩込みに際し谷之者<sup>(61)</sup>（矢之もの）が関わったことが明記される。

図版から見る谷之者は、その身体性において非人より明らかに上位のヒエラルヒーを持って描かれており、罪人引廻しの図においては、鬘を結い草履を履きさらに帯刀をしている。峯岸賢太郎は行刑の手配や監督をする者が小頭・横目であり、仕置役の中心にいたのが「矢之もの」であったと述べる<sup>(62)</sup>。刀は武士の身分標識の一つであるが、江戸期には町人に帯刀が流行し、何度か幕府から禁令が出て長刀（長脇差）は禁じられたものの、通常の脇差については曖昧に許されていたという<sup>(63)</sup>。尾脇秀和は百姓や町人は、役儀や神事などで限定的に帯刀を許される場合があり、それは勤中帯刀・役中帯刀と呼ばれ「身分に対して帯刀を許可・付与されたのではなく、その本人が任じられた役儀（職分）に付与されていたものともいえる<sup>(64)</sup>」と指摘する。

弾左衛門については『弾左衛門由緒書』享保四年（一七一九）二月に「私被召寄三番御番所様御門内迄刀帯相勤候様被仰付難有奉存候<sup>(65)</sup>、」とあり、一定内での帯刀は認められていた。しかし安永二年（一七七三）三月に町年寄三人から提出された申渡には、物貰いなどの帯刀は脇差においても罰するとの旨が書かれている<sup>(66)</sup>。三千石の旗本に匹敵するとされた弾左衛門でさえ、料亭では普通の客間ではなく別座敷を用意され、もし通常の座敷に通された場合は、弾左衛門の自費でその部屋の畳を総替えしたという<sup>(67)</sup>。弾左衛門配下善七のさらに下位にいた谷之者が、勤中帯刀・役中帯刀としても果たして二本差しが可能であったのだろうか。

## （２）被差別の構造

奈良、高野山、江戸の三箇所の谷之者が、同質のヒエラルヒーと被差別性を持つ集団であるのかという点については、中世期の被差別民が非人、河原者、散所に三分類され、これらは別系統であり混雑されることはないとする先学の研究を留意しなければならない。奈良の谷之者は内山永久寺に隷属する散所民的性格を持ち、高野山の谷之者は遺体の埋葬など三昧聖と同様に死穢に接し、また寺内の食事には別器を用いた。江戸の谷之者は穢多頭弾左衛門の支配下に置かれ行刑に携わっている。

具体的に死の穢れに触れるのは、高野山と江戸の谷之者である。しかし江戸の谷之者は行刑という死の現場に立ち会うものの、直接罪人を刑殺しその死体を処理するのは非人の役目であった。奈良の谷之者は散所に属して竹などの資材を運搬し、その職掌において穢れに携わる部分は、後述する竹という歴史的被差別性を持つ植物を運ぶことである。

奈良の谷之者は莊園制の崩壊後、現地にとどまり市井にまぎれたのか、また、どこかに移住したのだろうか。高野山の谷之者のルーツについて、藤井は谷之者の発生を、戦国末期の一般宗徒と交わら



ない、広義の浄土系である時宗方の集団ではないかとした。戦国末期にその孤立した集団はどこからやって来たのか。行基が大仏造立を担った東大寺と高野山との密接した関係が立ち上ってくる。<sup>(68)</sup>高野山の谷之者は旧来南都に居住し、行基の法化に浴したと伝える。隷属先を失った内山永久寺の散所民が、行き着く先として高野山を目指したと考えることはできないだろうか。高野山の谷之者が土木の技術を持っていたように、奈良の谷之者も運搬や修繕を行っており、また行基は土木事業者でもあった。

奈良及び高野山の谷之者と、江戸の谷之者はその読みだけでなく、弾左衛門が続べる穢多・非人集団の一員であったことから、同じく卑賤視される人々ではあるが、異なるカテゴリーに分類されるべきではないかと考える。江戸の谷之者の実態は不明瞭な部分が多い。『刑罪大秘録』に描かれる谷之者の姿は、江戸期の被差別民のイメージとは乖離する。月代を剃り鬘を結び帯刀をして描かれるのである。非人の描写とは明らかに異なる谷之者の身体性から、江戸期における被差別の構造を深く探る必要がある。弾左衛門関係の史料（「安永撰要類集」「南撰要類集」等）には、非人が鬘を結うことや衣服について度々奉上されており、被差別民とされた人々の中でも強い身分意識があったことがうかがえる。

三つの谷之者が、同質のヒエラルヒーと被差別性を持った集団であるのかを結論付けるのには、さらに各谷之者の実態を明確にしなければならない。いずれの谷之者にも卑賤視はあったが、時代によっても濃度は異なる。また、それぞれの谷之者を非人、河原者、散所に比定するには、同時代の被差別的職掌を持つ人々との関係についても調査が必要であろう。三つの谷之者に通底するのは、竹と関わり谷に居住したという点なのである。

## 結びにかえて一竹の表象

竹は農具や日用雑器を作り出し、さらに祭祀や芸能とも深く関わってきた。芸能に用いられた竹は、田楽や獅子舞、説経の簾などの楽器のほか、鉢叩きは竹を素材とした茶筌を売り歩き、また犬神人は寺社に隷属し死体の処理など穢れに携わる仕事をしたが、同時に弓や弦を売り歩き弦召とも呼ばれた。罪人の刑罰にも様々に使用され、鋸挽の刑では竹鋸を重刑の象徴として据えた。

一方で竹には霊性や呪力があると考えられ、神々が降臨する依代や忌竹としても使用されている。竹は一夜にして一メートルを超えて成長することもあり、さらに節は常の植物にはない理解しがたい不可思議な空間であった。竹の成長力と節の存在は人々に畏怖の念を起し、その空間に霊力と物語を重ねるようになる。中国四川省のアパ・チベット族に伝わるとされる『斑竹姑娘』<sup>(69)</sup>や本邦の『竹取物語』には、竹の節から美しい娘が誕生し、それを得た者に富や幸をもたらす。また絵巻「春日権現験記絵」に神が降臨したのは竹林であった。竹とは福に結びつくだけでなく、霊威が起る植物なのである。しかし霊験や幸福や富をもたらすはずの竹は、聖と穢れの境界を彷徨う植物になってしまった。

沖浦和光は竹の植生が豊富なスラウェシ（セレベス）やボルネオの諸島では、竹製の楽器である簾を現在でも神事や祭りに用いており、竹の文化は南太平洋の島々から黒潮に乗って伝わったのではないかと推測する。<sup>(70)</sup>竹は温暖湿潤な地域、すなわちアジアの温・熱帯地域に多く植生する。南方の島々

を伝いながら日本に伝来したのであれば、九州南部に竹にまつわる多くの物語があることにも肯える。

隼人（阿多隼人）は薩摩半島に居住した。ここは竹の産地であり『日本書紀』には木花咲耶姫命が出産したとき、「時に竹刀を以て、其の兒の臍を截る。其の棄てし竹刀、終に竹林に成る。故、彼の地を號けて竹屋と曰ふ<sup>(71)</sup>」と地名由来を語る。竹屋ヶ尾（鹿児島県南さつま市）には、臍の緒を切った竹刀を捨てたものが根付いたとされる竹藪（へら竹山）があり、近在の竹屋神社にはその竹が株分け<sup>(72)</sup>されている。

竹製品は縄文時代の遺跡からも出土しており、日本文化において長い歴史を持つ。しかし竹の持つ卑賤観について広範な視座からの論究は、一九九一年に沖浦による『竹の民俗誌―日本文化の深層を探る―』が刊行されるまで成されなかった。同書において沖浦は、聖と穢の両義性から「《竹》は、正と負の境目にまたがるマージナルな植物であった<sup>(73)</sup>」との重要な見解を投げかける。被差別と竹細工との関係は多くの研究で指摘されているが、その根源と明解な理由は見出されていない。

古代に遡り竹細工はヤマト王権にとって、中央にまつろわぬ化外の民が行う技であった。竹は強度もあり加工しやすい素材であるが、実際に籠や箕、笠などを作るには竹を縦方向に裂いて薄く削ぎ、さらに曲げ編み込む知識と技術が必要である。竹が植生を広げたのが九州南部の隼人の地であり、彼らはその技術に習熟していた。後に隼人はヤマト王権に征服され、「海幸彦山幸彦」神話の宮城門で吠える犬（吠声）として「汝命の昼夜の守護人となりて仕え<sup>(74)</sup>」、潮盈珠の呪力により「溺れし時の種種<sup>(75)</sup>の態、」を演じ、さらに「竹笠造作<sup>(76)</sup>」をもって隷属した。

このマージナルな植物が、なぜ負の部分強く重く担うようになったのだろうか。本稿では奈良、高野山、江戸の三つの谷之者たちの職掌や卑賤観、また竹とどのように関わってきたのかについて、文献や図像資料から明らかにしようと試みた。竹の持つ被差別の歴史の淵源を、「海幸彦山幸彦」に象徴される王権による征服・使役の歴史を経て、竹とは被征服民が奉仕するための植物というイメージが固定されたのではないかと推論した。しかし竹に表象される歴史的被差別性には、この神話のさらなる古層に源があるように思えてならない。

その古層とは日本の地勢にあると考える。山地が七割を占める日本の国土には、陽光が降り注ぐ山の尾根があり、尾根には日陰の谷が生まれる。日本文化は日向の山と日陰の谷が対置し育まれてきた。陽射しとそれが生み出す陰影によって形成される地形に、聖と穢という観念が生まれ、この二項対立する構造に差別や排除の濫觴があったのではないだろうか。そして、陰の地である谷に追いやられた人々に谷之者<sup>(77)</sup>がいた。竹はその植生として日向を遮り陰の地を生み出し、この構造における陰の民たちに通底した、穢れを表象する植物となっていったのではないだろうか。それを歴史、民俗、史料から具体的に明示することが今後の課題である。



## 註

- (1) 内藤久義 2018「説経と谷ノ者—『せつきやうかるかや』、『中将姫御本地』から」『口承文芸研究』41号 日本口承文芸学会 pp.79-90。内藤久義 2020「高野山・谷之者の原風景—図像と文献史料からの検討」松岡心平編『中世に架ける橋』森話社 pp.71-87
- (2) 渡辺広 1963『未解放部落の史的研究』吉川弘文館 pp.196-204
- (3) 山村雅史 2005「中世大和の被差別民一考」奈良県立同和問題関係史料センター編『研究紀要』11号 奈良県教育委員会
- (4) 奈良県立同和問題関係史料センター編 2005『奈良県同和問題関係史料第十集 大和国中世被差別民関係史料』奈良県教育委員会
- (5) 山村は近世大和の白毫寺周辺にも谷之者と呼ばれる人々が集住し、彼らは千寿万歳によって祝儀を得ていたが、十七世紀中頃には春日大社社家などの奈良町住人の葬送を行う、三昧聖の役割を果たしていたと述べる。前掲書（注3）p.6
- (6) 引用には以下を参照した。竹内理三編 1978『増補 續史料大成』第二十六巻-第三十五巻 臨川書店
- (7) 安位寺は奈良県葛上郡（現御所市）にかつてあり、一時期、興福寺別當經覚が止住していた。
- (8) 東京国立博物館編 1994『内山永久寺の歴史と美術 史料篇—調査研究報告書 内山永久寺置文—』東京美術 pp.10-35
- (9) 前掲書（注8）pp.38-66
- (10) 芸能史研究会編 1974『日本庶民文化史料集成 第二巻 田楽・猿楽』三一書房 pp.87-90
- (11) 前掲書（注8）p.43
- (12) 前掲書（注8）p.25
- (13) 奈良市同和地区史的調査委員会編 1986『奈良の部落史 資料編』奈良市 p.305
- (14) 渡辺は夙の表記について紀州を事例に、江戸時代初期以前には宿と書くのが普通であったと述べる。前掲書（注2）p.132
- (15) 谷川健一編 1971『日本庶民生活史料集成 第十四巻 部落』三一書房 p.496
- (16) 前掲書（注15）p.506
- (17) 谷ノ宿ノ物について山村は「白毫寺宿者を指していると考えられる」と述べる。前掲書（注3）p.22
- (18) 沖浦和光 1991『竹の民俗誌—日本文化の深層を探る—』岩波書店 pp.6-7
- (19) 脇田晴子 1978「散所論」部落問題研究所編『部落史の研究 前近代篇』部落問題研究所出版部 pp.55-56
- (20) 脇田晴子 1969『日本中世商業発達史の研究』御茶の水書房 p.117
- (21) 池田好信 1995「山城国」網野善彦他編『講座日本荘園史 7 近畿地方の荘園Ⅱ』吉川弘文館 pp.59-61
- (22) 川嶋將生 2004「宇治郡 山科散所」世界人権問題研究センター編『散所・声聞師・舞々の研究』思文閣出版 pp.218-221
- (23) この事例については川嶋がすでに「宇治郡 山科散所」で指摘している。前掲書（注22）p.220
- (24) 太田藤四郎編 1941『言継卿記 卷二』太洋社 p.297
- (25) 福田アジオ他編 1999『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館 pp.688-689
- (26) これらの距離は道路上ではなく直線距離を計測している。
- (27) 本節は以前に発表した拙稿「説経と谷之者—『せつきやうかるかや』、『中将姫御本地』から」、「高野山・谷之者の原風景—図像と文献史料からの検討」をもとに改編している。前掲書（注1）
- (28) 『大乘院寺社雑事記』文明四年（一四七二）正月二十七日条に、力者正陣法師が癪病になり高野山に登ったとの記述がある。辻善之助編 1934『大乘院寺社雑事記 第五巻』三教書院 p.231
- (29) 中田法壽編 1936『高野山文書 第五巻 金剛三昧院文書』高野山文書刊行会 pp.351-352
- (30) 喜田貞吉 1920「声聞師考—古代社会組織の研究」『民族と歴史』第三巻第六号 日本学術普及会 pp.1-23
- (31) 前掲書（注2）pp.196-204

- (32) 室木弥太郎 1970『語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究』風間書房 p.278
- (33) 日野西真定 2001「高野山三昧聖の研究」細川涼一編『三昧聖の研究』硯文社 pp.479-486
- (34) 和歌山の部落史編纂会編・和歌山人権研究所著 2011『和歌山の部落史 史料編 高野山文書』明石書店
- (35) 藤井寿一 2013「高野山「谷之者」の身分意識」畑中敏之他編『差別とアイデンティティ』阿吽社 pp.105-128
- (36) 山陰加春夫 2007「高野の聖たち一高野山一心院谷の場合一」『密教文化』218号 密教研究会 pp.57-82。山陰加春夫 2013「中世高野山における平等と差別」『部落解放』2013年1月増刊号（672）解放出版社 pp.135-143
- (37) 山路興造 1990『翁の座一芸能民たちの中世』平凡社 p.80
- (38) 大藤時彦 1985「隠坊」『日本大百科全書 4』小学館 p.526
- (39) 倉光清六 1921「出雲地方の鉢屋」『民族と歴史』第6巻第3号 日本学術普及会 p.31
- (40) 続真言宗全書刊行会編 1982『続真言宗全書 第三十九』続真言宗全書刊行会 p.335
- (41) 日野西真定編著 1983『高野山古絵図集成』清栄社
- (42) 絵図タイトル及び制作年代は前掲書（注41）に依拠している。
- (43) インターネット公開による閲覧。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1365404/1> 2018年9月10日閲覧
- (44) インターネット公開による閲覧。[https://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht?PPN=PPN3303601089&PHYSID=PHYS\\_0001](https://digital.staatsbibliothek-berlin.de/werkansicht?PPN=PPN3303601089&PHYSID=PHYS_0001) 2018年9月19日閲覧
- (45) ベルリン州立図書館蔵本より古い九州大学医学図書館蔵本では「谷之者」と表記されている。ベルリン州立図書館蔵本の文字は楷書で書かれているが、他の四点の写本はすべて崩し書きであり「谷」の文字を崩すと「善」に近似していることから「谷」の誤写ではないかと考える。
- (46) 関口博巨 2010「弾左衛門支配とその境界一東国の賤民身分と差別一」白川部達夫・山本英二編『村の身分と由緒』吉川弘文館 p.161
- (47) 中尾健次編 1995『弾左衛門関係史料集一旧幕府引継書 第一巻』解放出版社 p.163
- (48) 峯岸賢太郎は「矢之もの」の呼称について弾左衛門配下の穢多は、高野山谷之者を中核にして近世において編成されたものではないかとし、矢野姓に由来するのではなく逆の可能性もあるとの疑問を投げかける。峯岸賢太郎 1996『近世被差別民史の研究』校倉書房 p.44
- (49) 谷川健一編 1980「穢多の一大族制」『日本庶民生活史料集成 第二十五巻 部落（二）』三一書房 pp.395-419
- (50) 前掲書（注49）p.409
- (51) 中尾健次編 1995『弾左衛門関係史料集一旧幕府引継書 第二巻』解放出版社 p.381。「安永撰要類集」では「非人頭善七手下小傳馬町老丁目河岸ニ罷在候小屋頭長蔵と申もの江、」と長兵衛から長蔵に名前が変わっている。前掲書（注47）p.79
- (52) 笹間良彦 1991『図説・江戸町奉行所事典』柏書房 p.233
- (53) 森貞二郎 1920「谷の者と細工」『民族と歴史』第4巻第4号 日本学術普及会 p.26
- (54) 浦本誉至史 2003『江戸・東京の被差別部落の歴史一弾左衛門と被差別民衆』明石書店 pp.102-112  
成沢栄寿 1981「弾左衛門と配下の穢多・非人の生活」部落問題研究所編『部落史の研究 前近代篇』部落問題研究所出版部 pp.188-199
- (55) 前掲書（注15）p.433
- (56) 前掲書（注47）p.193
- (57) 筆者が適宜読点を入れた。
- (58) 前掲書（注52）p.243
- (59) 「紀伊続風土記」に山奴は「此は山上の非人番なり。大門一心院。千手院。南谷等の諸所に山奴小屋ありて住居す。山上盜賊胡乱のものを召捕り。或は山下にても不埒の輩ある時は召捕。拷問の役目として山下諸庄の非人番等を手下とす」と記されている。前掲書（注40）pp.334-335

- (60) 前掲書 (注 46) p.158
- (61) 前掲書 (注 51) pp.430-431
- (62) 前掲書 (注 48) p.44
- (63) 尾脇秀和 2018『刀の明治維新「帯刀」は武士の特権か?』吉川弘文館 pp.43-54
- (64) 前掲書 (注 63) p.143
- (65) 前掲書 (注 15) p.431
- (66) 前掲書 (注 51) p.186
- (67) 前掲書 (注 15) p.428
- (68) 2014 年 10 月 2 日「産経ニュース」インターネット配信に、高野山金剛峯寺の木造執金剛神立像から、東大寺の重源の要請で作られたことを示す文書が発見され、金剛神立像が東大寺で作られたことも判明したと報じた。重源の『南無阿弥陀仏作善集』に、同像と四天王像などを高野山別所に安置したと書かれており、今回の発見はそれを裏付けた。  
<https://www.sankei.com/region/news/141002/rgn1410020019-n1.html> 2014 年 10 月 3 日閲覧
- (69) この説話については『竹取物語』の源泉との説があったが、四川省に類話が一例しかないこと、斑竹娘説話の成立の報告がないことなど、現在では逆に『斑竹姑娘』が『竹取物語』の影響を受けたとの論が発表されている(三谷栄一編 1975『鑑賞日本古典文学 第 6 巻 竹取物語・宇津保物語』角川書店 p.13。片桐洋一他校注・訳 1994『新編日本古典文学全集 12 竹取物語・伊勢物語・大和物語・平中物語』小学館 pp.91-92)。また繁原央は 1998 年に斑竹姑娘譚の調査を四川省アパ・チベット族居住地域で行っており、四川省の民間文学研究者及び地元住民に聞き取りを行い、調査の範囲ではアパ・チベット族に斑竹姑娘譚が伝承されていないことを確認している。繁原央 2004『日中説話の比較研究』汲古書院 pp.325-333
- (70) 前掲書 (注 18) pp.4-5
- (71) 坂本太郎他校注 1967『日本古典文学大系 67 日本書紀 上』岩波書店 p.156
- (72) 竹屋神社 <http://takaya-jinja.jp/> 2020 年 9 月 10 日閲覧
- (73) 前掲書 (注 18) p.220
- (74) 倉野憲司校注 1963『古事記』岩波書店 p.76
- (75) 前掲書 (注 74) p.76
- (76) 黒板勝美・国史大系編集会編 1974『新訂増補 国史大系 令集解 第一』吉川弘文館 pp.141-142
- (77) 香川県塩飽諸島にも谷之者と呼ばれる被差別民がいたことを『丸亀市史』は記す。元禄十年(一六九七)の史料に谷之者は別帳扱いされており、後年の「塩飽島諸訳手鑑」(正徳三年・一七一三)では「穢多」の呼称に変わっている。丸亀市史編さん委員会編 1994『新編丸亀市史 2 近世編』丸亀市 pp.516-518